

余山貝塚の生業活動

—古鬼怒湾沿岸における動物資源をめぐる集団間関係—

植月 学

はじめに

本稿では 1959 年の國學院大学の 大場磐雄教授による調査資料 [銚子市教育委員会 2001] (以下、「大場資料」) の脊椎動物遺体の分析結果を、古鬼怒湾周辺の遺跡群と比較し、動物資源をめぐる遺跡間関係について検討する。大場資料は小形標本をほとんど含まないことから、すべて現場採取資料であると考えられる。時期的にはおおむね後期中葉～後葉を主体とする時期の所産である。分析方法、結果の詳細については別稿 [植月 2012] を参照されたい。

1. 大型魚類をめぐる集団間関係

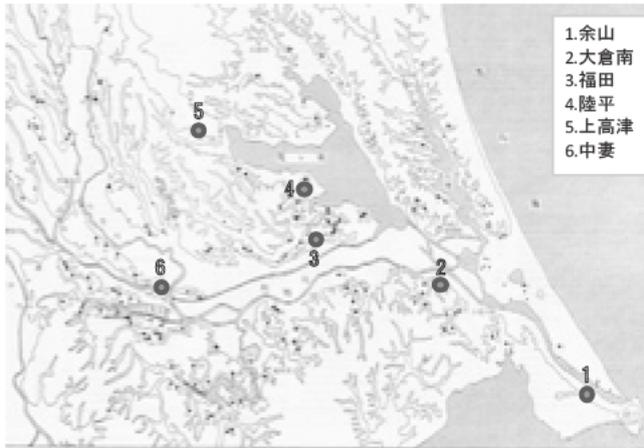
第 2 図に古鬼怒湾沿岸遺跡の後期中葉の魚類組成を示した^{〔註 1〕}。取り上げた遺跡は古鬼怒湾の湾口部から湾奥部まで、多様な環境に立地し、貝類組成はそれに応じた多様性を示す (表)。しかし、魚類組成にはそれほど大きな差は見いだせない。たとえば同じタイ科でも汽水域にも進入するクロダイ属と外洋沿岸を好むマダイの比率は、本遺跡とやや上流の大倉南、あるいは湾奥部の上高津でほとんど差がない。

古鬼怒湾沿岸の後・晩期貝塚の魚類組成を比較した吉野健一は、魚類が貝類に比較してより広範なエリアから選択的に捕獲されていたと指摘した [吉野 2008]。このような貝類と魚類の入手範囲の差は本地域の遺跡群の水産資源利用を検討する上で興味深い問題を提起する。

小宮孟は上高津貝塚の報告において、優占貝種であるヤマトシジミから想定される遺跡周辺環境とは調和しないマダイ、トラフグ属、ブリ属などの大形魚が特定の層準に集中することを指摘し [小宮 1994]、①縄文海進の影響による周辺環境の多様性、②交易などによる搬入の 2 通りの解釈を示し、「当時の漁撈集団の行動圏の広さや経済活動の多様性を示唆するもの」として後者の可能性が高いことを論じた。

樋泉岳二もやはりヤマトシジミ主体の中妻貝塚の報告において、マダイ、ブリ属、コショウダイ属、ヒラメ科、フグ科など、普通汽水域では見られない魚種が見られ、しかも大半が大型魚で占められる点から、その入手方法を問題とした [樋泉 1995]。すなわち、「(1) それらが中妻貝塚人によって直接漁獲されたものか、交易などによって間接的に入手されたものか (2) 直接入手されたものとするれば、漁場からどの程度離れていたか」という点である。樋泉は小宮の説に対し積極的な反論材料は見当たらないとしつつも、東京湾内における昭和のマダイ漁獲例を挙げ、海況次第では古鬼怒湾内にも外洋水とともにマダイが紛れ込み、一時的な漁場を形成していた可能性もあるとして、判断を保留している。

余山貝塚の魚類遺体には上記遺跡で問題とされた大形のマダイやフグ科などが含まれる。特にブリ属とヒラメ科については他遺跡よりも比率が高い。小宮の交易説にたてば海産大型魚の供給源の条件に合致する。しかし、湾奥部集団が湾口部に出漁したとしても同じような組成になり得る点は注意を要する。



第1図 遺跡の位置

一時的な漁場形成の可能性についてはどうだろうか。マダイなどの湾奥への進入による一時的な漁場形成が原因であるとすれば、湾口から湾奥にかけてマダイの比率が漸減しそうなものである。しかし、実際には湾の中間に位置する福田は上高津よりマダイの比率が低い。このことは上高津の住人がより積極的にマダイを入手していたことを示す。先述のように、上高津住人が湾口部まで出漁した、あるいは湾口部の集団より入手したという二つの可能性が浮上する。

入手の範囲が魚種によって異なることは体長分布からも示唆される。第3図には上高津と余山のマダイ、スズキ、クロダイの体長組成を示した。ただし、余山は古い調査なので小形個体の回収率が低いと推測される点に留意する必要がある。

マダイの体長分布は上高津では小形から大形まで幅広く、ピークは60cm前後の大形個体にある。余山の計測標本数が十分でないものの、その範囲は余山の体長分布と重なる。一般に若魚ほど湾奥に進入する頻度が高いとされるので、上高津の少なくとも大形の個体は湾口部（～湾外）由来であると推測される。一方、スズキの体長分布は上高津では余山よりも小形にピークがある^[註2]。スズキに関しては上高津住人が大形個体の多い湾口部まで積極的に出漁したとは考えにくい。クロダイの体長には両遺跡でほとんど差がない。したがって同じ海域で捕獲されたともみなせるが、内湾浅海域というクロダイの生息環境からすれば、それぞれの遺跡近傍の浅海域で捕獲された個体群がたまたま同じようなサイズになったとみることもできる。

上高津のクロダイ、小形スズキや小形マダイは遺跡近傍で入手可能であったと推測されるものの、大形マダイについては、すでに指摘したように湾口部集団から入手していたか、自ら湾口部に出向いて漁獲していた可能性がある。湾口部に出漁していたのであれば、大形スズキを漁獲する機会もあっただろうから、大形スズキの希少性は湾口部出漁に否定的なデータである。ただし、集団による嗜好、保持している漁具・漁法の差などによる可能性も捨てきれないので、決定的な証拠とまでは言えない。

2. 漁具保有の集団差

近年、金子浩昌により本遺跡出土の骨角器が集成され、詳細な検討が加えられた [金子 2009]。それによれば、本遺跡の骨角器組成は単純銚頭と釣針の多さが古鬼怒湾沿岸の他の遺跡との大きな差であり、これに他遺跡でも多く出土するシカ中手・中足骨製のヤス状刺突具が加わる。

銚頭と釣針が捕獲対象に対応していたとすれば、他遺跡では少ない種がその候補となる。銚漁ではイルカ類、アシカ類などの海獣類、銚漁、釣漁では沖合を回遊するブリ属、サワラ属などが相当する。金子も銚漁の対象としてイルカ類などの海棲哺乳類、ウミガメ類を想定している。ただ、漁獲物全体からすれば少量で、銚頭、釣針の多産に見合うかは疑問も残る。

今回の下郷コレクションの報告では余山において圧倒的にヤス状刺突具が多いことが示された（漁具の約7割以上）。大場資料は古い調査のため目に付きやすい銚頭や釣針が単純なヤス状刺突具よりも多く回収される傾向にあったと推測される。銚や釣針の実際の割合が残されているほど多くなかつ

たとすれば、漁獲物の組成とも矛盾はない。

余山で多量に出土したヤス状刺突具が漁獲物組成に対応するとすれば、主体種であるスズキ、クロダイ、マダイなどがその候補となる。もちろん遺物として残らない網のような漁具の存在も想定する必要はある。より上流の大倉南や湾奥の上高津では漁具はほとんどヤス状刺突具しか出土していないが、両遺跡でも3種が主体となる点は共通しており、同様の漁法が想定できる。

余山でやはり多く出土した釣針が湾口部や湾外の比較的水深のある海域で用いられたとすれば、多産している大形マダイや大形スズキはその漁獲対象物の有力候補となる。上高津住人が湾口部に出漁して同じように大形マダイを入手していたとすれば、釣針を用いた形跡がない点は説明がつかない。したがって、体長組成の面に加え漁具組成の面からも、上高津住人のマダイは交易による入手の可能性が高い。釣針と大形マダイを多産する余山はその供給源の有力な候補といえるだろう。

3. 骨角器生産と素材の入手

大場資料の調査では擦り切り痕のある中手・中足骨や鹿角が多く認められた。特に大形の個体の角坐骨や落角が多く認められた。その多くは第1分岐部付近で角幹を周囲全体から敲打することによって折り取っている。これに対して、先端部付近は擦り切りによって切断している。前者の角幹部は縦に裁断されて銚頭の製作にも利用されたと推測される。金子の集成では角坐を残す銚頭が報告されており〔金子2009〕、少なくとも用途の一端は銚頭の製作にあったと考えられる。

シカの部位組成も骨角器生産に関連すると推測される特異なあり方を示した。筆者はかつて東京湾沿岸の貝塚におけるシカ、イノシシの部位組成を比較し、シカでは頭部の比率や、中手・中足骨の比率に遺跡によって大きなばらつきがあることを明らかにした〔植月2010〕。第5図ではそのうちのいくつかに本遺跡の結果を重ねた。本遺跡は市原市西広遺跡(後期の合計)とともに頭部が多いパターンに属し、千葉市六通貝塚(晩期前浦期合計)、千葉市有吉北貝塚(中期中葉)との差は明らかである。本遺跡は特に上顎が下顎を大きく上回る点が特徴的である。

本遺跡のいま一つの特徴は中手・中足骨の比率が高い点である。同様のパターンとして、有吉北があげられる。有吉北については、骨器用の素材として、中手・中足骨だけが搬入された可能性を論じたが、本遺跡も同様に解釈できる。取り上げた遺跡ではいずれも中手・中足骨製の骨器が多く出土している。中手・中足骨は比較的堅牢な部位であり、全身が廃棄されれば、六通や西広のように少ない方がむしろ不自然であって、これは骨器に利用された結果と解釈できる。逆に、本遺跡や有吉北の場合は骨器に使われることが少なかったか、外部から供給されたかのいずれかになる。本遺跡では中手・中足骨製ヤス状刺突具が大量に出土していることから、前者でないことは明らかである。したがって、自前のシカ捕獲により供給できる量を上回る中手・中足骨が持ち込まれた、つまり交換などにより入手していた可能性がある。

落角の多さは骨角器製作のために大量に角を持ち込んでいたことを示す。下顎に対する上顎の多さも落角以外に頭蓋骨付の角を多く持ち込んでいたことによるのかもしれない。落角は毎年発生するので遺跡周辺で採集できたかもしれないが、角付の頭蓋骨の大量入手はそれほど容易ではないので、やはり他集団からも入手していた可能性がある。

さらに詳細に検討すると、本遺跡は頭蓋に連なる環椎、中手骨に連なる前肢の橈骨遠位端、中足骨に連なる大腿骨の遠位端～脛骨なども他遺跡に比べて多く出土していることが指摘できる。これは交連した状態の骨が素材として搬入された結果かもしれない。付随する肉量が多い肩甲骨や上腕骨、あ

るいは寛骨、大腿骨（近位端）などは同時に持ち込まれることが相対的に少なかったことになるので、肉の付随する部位を除去した後に搬入されたと推測される。

福田貝塚では後期前葉から中葉にかけて、シカ中手・中足骨が加工される割合が増加するのに対し、イノシシ腓骨の加工割合が変わらない点と、動物遺体組成におけるシカの増加を結び付け、漁具としての骨角器製作と狩猟活動の変遷の関連を想定している [奈良崎 1991]。本遺跡のシカ部位組成も計画的な骨角器素材の入手を示すもので、シカ猟の目的の一端がそこにあったことも考えられる。

石橋宏克によれば本貝塚出土の石器は、骨角器・貝輪・玉などの生産に関係する石器が多いことが特徴とされ [石橋 2000]、「未製品や破損品が多く出土している点から、本貝塚がこの地域の骨角器・貝製品の生産の中心的な役割を果たしていた」とされる。今回の結果は骨角器素材の面からも、生産地としての性格を浮かび上がらせるものであった。

シカとイノシシの比率（後期前葉から中葉）は古鬼怒北岸ではイノシシが優占し、南岸ではシカが優占するという明確な傾向を示した（第4図）。この差はシカ角、骨を用いた骨角器製作と関連する可能性もある。今後上記のような部位組成や加工頻度の差を各遺跡で比較していく必要がある。もう一つの可能性として、組成差が地理的位置と一致することから、そもそもシカ、イノシシの生息量に両岸で差があったことも考えられる。そのような生息量の差を生んだ環境条件の違いは明らかでないが、たとえば、下総台地に比べて常陸台地側は狭隘な台地が続くことが影響しているのかもしれない。

おわりに

余山貝塚では湾口部という立地を背景に、外洋性の魚類、海獣類、海鳥類などの獲得がおこなわれていた。しかし、銚頭や釣針などの漁具から想定されるような外洋性漁労に特化した漁労基地、あるいは漁村的な性格ではなく、ヤス状刺突具を用いた汽水域や浅海域での漁労と、陸獣、特にシカの狩猟も盛んであったと推定される。外洋以外にも湾内や、河口域、後背湿地、台地上などで多様な資源獲得活動が展開していたことになる。このことは多くの人骨の出土や祭祀遺物の出土と合わせて、本遺跡が多様な活動の帰結点としての定住的集落であった証拠となる。

貝輪や骨角器、玉類の生産からもうかがえるように、本遺跡は多様な物資の生産、集積地であり、地域の物資交換のセンターであったと推測される。湾口部という立地はおそらくは素材の入手と、舟を用いた上記物資の流通に最大の利点があったのであろう。骨角器素材が優占する部位組成のあり方はこうした遺跡の性格によく合致するものであった。今回の分析では上高津のような湾奥部の集団へマダイなどの湾口部周辺の漁獲物を供給していた可能性も浮上した。

本稿は2013年2月16日に明治大学において開催されたシンポジウム「下郷コレクションの由来と霞ヶ浦の貝塚」において発表した内容に加筆、修正したものである。特に下郷コレクションの骨角器組成が明らかになったことによって漁労に関する議論の書き換えが必要となった。古い調査のごく限られたデータによって議論しているため、今後他遺跡の骨角器組成や魚種組成、体長分布の詳細が明らかになれば、同様に論旨の修正を迫られるかもしれない。その意味ではあくまでも試論と考えており、今後もデータの集積と解析を続けていきたい。末筆ながら貴重な資料を分析させていただいた銚子市教育委員会、および発表の場を提供していただいた阿部芳郎氏（明治大学）、加藤俊吾氏（大阪歴史博物館）に感謝申し上げる次第である。

【註】

- (1) 各遺跡のサンプリング方法が異なるため、ここでは採取法によるバイアスが少なくと推測される大型種 10 種に絞って比較した。
- (2) 余山においては回収法の問題から小形のズキが回収されていないという解釈もあり得る。しかし、後述するクロダイの体長分布では両遺跡で同程度のクラスが回収されている点を踏まえれば、ズキの体長分布の差を単なるサンプリング・エラーとは考えにくい。

【引用文献】

石橋宏克 2000 「余山貝塚」『千葉県歴史 資料編 考古 1 (旧石器・縄文時代)』千葉県 pp.836-843

植木 学 2010 「部位組成の比較からみた縄文時代のシカ・イノシシ利用」『比較考古学の新天地』同成社

植木 学 2012 「現利根川河口部を中心とした動物資源利用～余山貝塚の動物遺体～」『考古学ジャーナル』627 pp.17-21

金子浩昌 2009 「千葉県銚子市余山貝塚出土骨角器の研究」『東京国立博物館所蔵 骨角器集成』東京国立博物館 pp.278-302

小宮 孟 1994 「上高津貝塚コラムサンプルから水洗分離した動物遺存体」『上高津貝塚 A 地点』慶應義塾大学文学部民族学・考古学研究室 pp.241-290

佐藤孝雄・吉沢宣雄 1994 「脊椎動物遺体」『上高津貝塚 A 地点』慶應義塾大学文学部民族学・考古学研究室 pp.190-239

田中正明 1991 「哺乳類」『茨城県福田（神明前）貝塚』財団法人古代学協会 pp.164-191

銚子市教育委員会 2001 『銚子市余山貝塚調査概要』

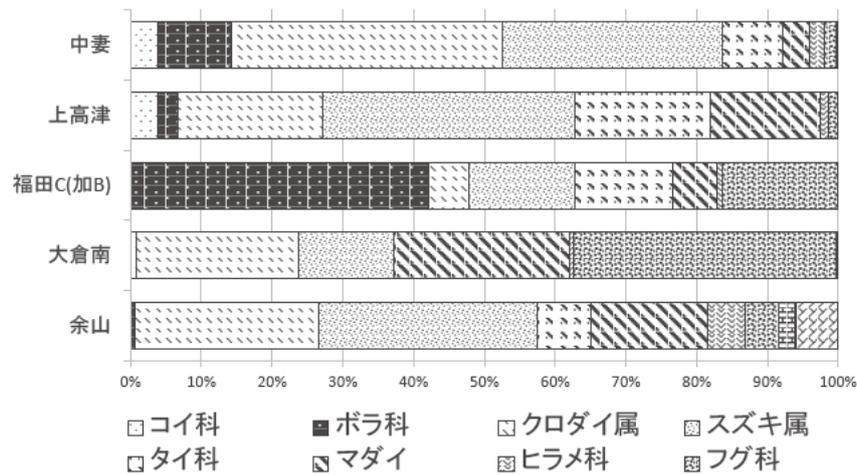
樋泉岳二 1995 「魚類」『中妻貝塚発掘調査報告書』取手市教育委員会 pp.103-113

奈良崎和典 1991 「魚類」『茨城県福田（神明前）貝塚』財団法人古代学協会 pp.153-163

西村正衛・金子浩昌 1956 「千葉県香取郡大倉南貝塚」『古代』21・22 早稲田大学考古学会 pp.1-47

西本豊弘 1995 「鳥類・哺乳類」『中妻貝塚発掘調査報告書』取手市教育委員会 pp.113-118

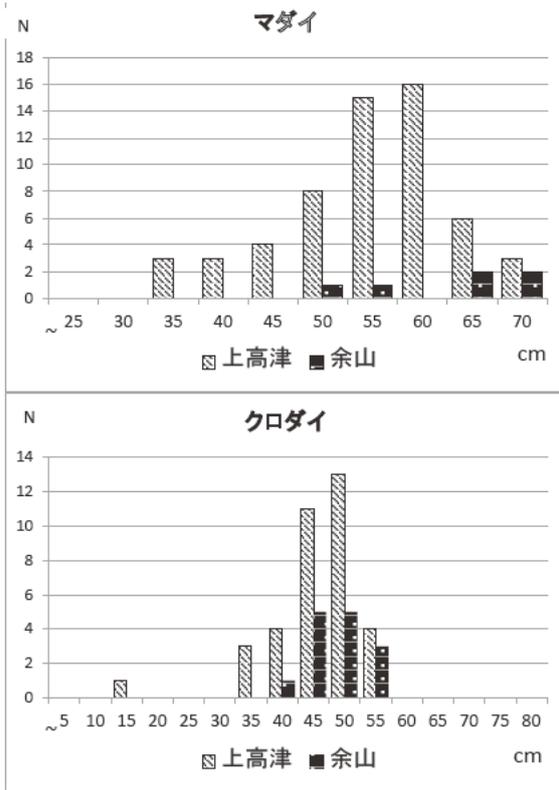
吉野健一 2008 「魚類利用からみた古鬼怒湾沿岸における縄文時代後・晩期の土器製塩の展開」『貝塚研究』11 pp.95-104 園生貝塚研究会



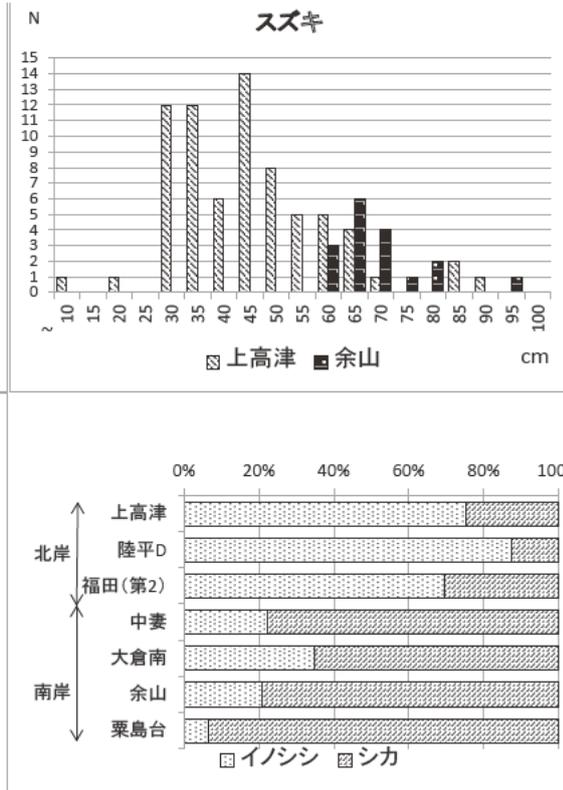
第2図 古鬼怒湾周辺遺跡の魚類組成（大型種のみ・同定標本数）

表 古鬼怒湾周辺遺跡の貝類組成

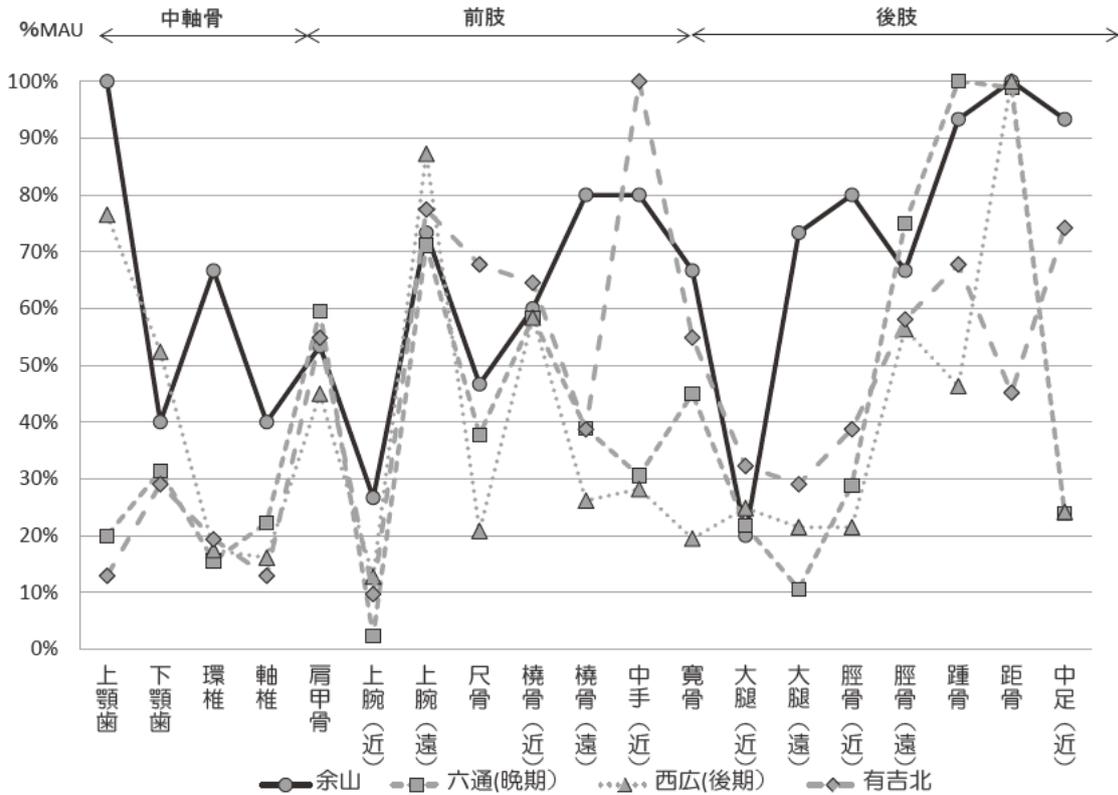
	立地	遺跡	主体貝種	環境
湾口 ↑ ↓ 湾奥	古鬼怒湾湾外	余山	マルサルボウ、ベンケイガイ、チョウセンハマグリ	外洋砂底
	古鬼怒湾湾口部	大倉南	ハマグリ、シオフキ	内湾砂泥底
	古鬼怒湾湾中部	福田（C・加曾利B）	ハマグリ、ヒメシラトリ、シオフキ、オオノガイ	内湾砂泥底～湾奥泥底
	古鬼怒湾湾奥部	上高津 A 地点	ヤマトシジミ、ハマグリ	汽水、内湾砂泥底
	古鬼怒湾湾奥部	中妻	ヤマトシジミ	汽水



第3図 魚類推定体長の比較(現場採取資料)



第4図 古鬼怒湾周辺遺跡のイノシシ・シカ比



第5図 シカ部位組成の比較